

エッセイ

# たかが川柳されど川柳—平成二五年下半年—

上野 一彦

## 愛しのローラー

あらゆる通販瘦身グッズを試してきた。モノによっては発注し手元に届いたものの、予想外の面倒くささに使わぬまま、欲しいといった人にさし上げたもの、短期間に査定評価を行い、やっぱりねとか、最初から分かっていたのにとこの言葉とともにロッカーの奥にしまいこんでしまったものも多々ある。かさばるモノは運動好きの友人や親戚の

ものが私の最初の期待と同じ期待を抱いて持ち帰った。新兵器ロボボーイIIも半年ほど居間に鎮座した後、行きつけの床屋のお兄さんに引き取ってもらった。

性懲りもなく、カタログとか、深夜の実演番組などを見ていると、化粧品などと同じくモデルと自分とが優雅に重なり、それこそが業者の思惑であることを百も承知の上で、つい購入用紙に記入しFAXしたり、電話をかけてしまったりする。『**通販に騙されないぞでも電話**』これじゃまるで悪女との付き合いのようです。

何度、いや何十回繰り返したことだろう。そういえばダ

イエット食品やサプリメントも同様である。ある種のサプリメントが仕掛けられているのかもしれない。「ヒトは試すことのできる動物である」と言い聞かせつつ、「通販おじさん」の名を頂戴してきた。

カミさんに「もう買いません」と固く約束しておきながら、ある眠れぬ夏の夜、ハンディな「3Dローラー」なる商品が私の脳を強く刺激した。フェイスとボディの二つのアタッチメントがある。ゴムのローラーをつけたボディ用で、腹の周りをブルブルやると余分な脂肪が減るという商品である。しかもパチンコ玉が三つ埋め込んだようなフェイス用に付け替え、顔をブルブルとマッサージすると、小顔というかエイジングによってほほの肉が緩み始めたご婦人にはよさそうな優れものである。早速、声を潜めて発注した。

一日千秋の思いで待っていると、数日後に件の品物が届いた。「君の美容のためにいいモノを見つけたから買っておいたよ」と、自分でもあきれほどの調子の良さで家内に使い方を説明した。初めさしたる関心を示さず、バレバレだったかなと思いきや、カミさんちゃんと手に取っているではないか。女性とはどこまでも不思議な生き物である。風呂上りなど、結構ブルブルとやっている。どうだい効

き目ありそうかいなどと白々しい会話も平和な家庭的一幕である。その家内が寝室に消えた後、いよいよボディ用アタッチメントの出番である。

座ると余計目立つ相撲取りのまわし化したタルミ部分に押し当てる。願いを込めて強く押し当てると摩擦抵抗が多く止まってしまふ。されば「縮まれ、縮まれ」と念じつつ優しくあてがうと、ブルブルとかなり共鳴する。殊の外刺激的である。これだけブルブル細かくゆすぶれば、ピフォア・アフターじやないが、必ずや効果があるはずだ。いちいちウエストサイズを測って「3cm減！」などと叫んだりはないが、ひたすらこのブルブルを繰り返かえした。

減ったような気もすれば、大まわしから中まわしになっただような、堅いまわしがやや軟化したような気もする。しかし体重に変化はない。私の好物の脂肪が層のようになって豚の三枚肉から、細かく脂肪がちりばめられた霜降り状態になりつつある気もする。食ったらさぞやうまかろうと、共食いのイメージを振り払い振り払い、ブルブル行進は続いた。

一〇日間程そんな攻防が続いたが、やがて家内の使用頻度も減り、ブルブルも卒業したらしい。こうしてついに私専用になった愛しのローラーは、入浴時に風呂のなかでの

使用が最も効果的という防水性のある優れたものであることも判明し、その後、風呂場の必携道具となった。あれから数ヶ月、わが身に著しい瘦身効果が認められなかったせいか、過去の諸道具と同じように今はその役割もほぼ終えたようで、静かに居間の片隅で眠りにについている。

### 通販余話

名にし負う通販オタクであることを認める。これは血筋かもしれない。我が家の負の遺産といえ父から譲られた伊豆大島の天文台がある。これなど「売れない通販用品特集ベストテン」の第一位を飾った天文台ドームをうっかり買ったことが発端である。その後、ドームに見合った反射望遠鏡を買い、それを安定させるコンクリートの土台が必要となり、それを設置する土地が必要となりというふうにわらしべ長者の逆というか、どんどん貧乏神が取りついていった、いわくつきの代物であった。『**通販を馬鹿にしな**がら**ついで電話**』も、そんな自分を戒める一句である。

ある日、こっそり通販カタログを眺めていて、私の目が釘付けになった。万が一の時に役立つ『**熊撃退スプレー**』

という商品がそれである。ドイツ連邦犯罪捜査部認定、五二八〇円(スタンダード)、三九八〇円(コンパクト)。うたい文句はこうである。「もしもトレッキングやフィッシングの最中に熊に会ったらどうしますか・・・(中略)・・・突然クマが攻撃してきたらスプレーを噴射し、速やかに安全な場所に移動してください。・・・」

如何にも熊が出そうな山道や私の好きな尾瀬の木道を歩くときにも、熊よけの鈴をつけている人に出会うことがある。必至に餌を探している熊と、人との出会いを回避するための道具であり、怖い人間の存在を知らせるための道具でもあり納得する。

防虫スプレーのようにあらかじめ自分に振り掛けておいて、私はおいしくありませんと熊に伝えるものでもなさそうである。撃退用とあるのだから、出会ったその瞬間に使うものにはいいない。

しかし、この撃退用のスプレー、うっかり熊に出会ってから取り出す余裕があるのだろうか。西部劇に出てくるガンマンのように腰にホルダーをつけて使うようでもない。いったい、そうした緊急事態に出会った人がどれくらいいて、このスプレーを上手に取出し、熊の撃退に成功した例がどの程度あったのかを是非知りたい。

ついでにもう一つ。自衛隊用品販売店(通称PX)でしか販売されぬ垂涎の「ブルーインパルスニットキャップ」の五〇周年記念モデルも通販で限定販売されている。帽子といえども軍事用品である。ところがその製品は中国製。どうやって流通経路を確保したのか。国家機密に近いものを感じる。中国製品の進出のすごさと同時に、以外と冷え切ったとされる日中関係も、ことのほか見えないところでは進んでいるのかもしれない。

### 亡き母との再会

七年前に亡くなった母と思いがけないところで再会したある学会の講演が終わった後、知り合いの方が一冊の本を片手に私を訪ねてこられた。昭和三十六年、日本で最初の重症心身障害児施設「島田療育園」(現島田療育センター)が東京の八王子に開設された。その初代園長小林提樹先生の足跡を描いた「愛はすべてをおおう小林堤樹と島田療育園の誕生」(中央法規)その後、「愛することからはじめよう―小林堤樹と島田療育園の歩み」として大月書店から再出版」という本である。

島田療育園を開設するにあたって資金提供をされた、母の友人で障害児をもつ母親でもあった島田与志さんが寄せられた一文に登場する「上野」という人物との関係を尋ねられた。その数ページを読んですぐに私は、「これは私の母です」と答えた。この本にある、一文を紹介しよう。

土地を求めて

・・・それから再び、施設づくりのための土地を探すのに、小林先生と私だけでずいぶん歩きました。夫と一緒に行ったこともありましたが。多摩の土地を紹介してくれたのは上野正栄さんという知的障害の子どものお母さんでした。上野さんは立派な方で東京都の結婚相談所の相談員をしていらして、小林先生のところでお会いしました。お子さんのお二人が知的障害で、マーちゃんという子を連れてきてわが家でもよく遊びました。ドライブにも親子でうちの車に乗って一緒に出かけました。車中で上野さんはお子さんが幼稚園で教わってきたという童謡を楽しく歌ってくれました。しかし、上野さんもずいぶん辛い苦労を、思いをされてきました。幼稚園ではバスに乗ると、「上野のところは馬鹿ばかりでうつるから乗るな」と他の親子がバラバラと降りてしまったそうです。しかし、兄弟の中でひとり

優秀なお子さんがおられ、後に奮起して東大に合格しました。今は某大学で教授をされておられるそうです。

その上野さんが、「お宅が山を買ってくれる。それで、私はお金は出せないけれど地主の所に行ってお願ひする」と、この多摩の地主さんの家を一軒一軒回ってくれました。「隣のゴルフ場は営利事業だけれど私たちは社会事業です」と言っておられ、それで土地が安く買えました。

上野さんもその時は「島田」に入るつもりでしたが、重症心身障害児ではないので入ることができず、千葉の八幡学園に入園されたことでした。

（島田与志 第一節 親みんなのちからで 島田療育園の創立を目指して ページ五九〇〜六〇〇）

小林堤樹先生はかつて日赤産院の小児科の部長で、弟正彦の主治医というご縁であった。私自身、大学の進路で悩んでいたころ、東京大学に三木安正先生がいてと教えてくださったのが小林先生だった。専門課程に進学後、私は念願の三木先生に師事し、最後の弟子として先生を看取るお役目まで仰せつかった。

その小林先生も三木先生も、母も姉弟もみな鬼籍に入ってしまった。母は父の幼馴染で従妹という関係。血族結婚

く私にづらい思いをさせぬよう心を砕いて育ててくれたからである。大した学歴など何もないのに、心を許せる深い最良の友人たちがいつも母のそばにいたような気がする。かつて還暦を迎えたある日、家内に、「これからどんな夫であってほしい」と尋ねると、一言、「普通の人になつてください」といわれ、驚いたことがある。

確かに、私は私がかもう一人いたら決して友達にはならないだろうと思うことさえある変わり者だと、自覚している。そうした私ではあるが、素晴らしい家族や仲間たちに恵まれてきたのは、母自身が持っていた、こころの財産のおかげかもしれない。

良く晴れた日など空を見上げつつ、ふと、『母はもういないのだな』と限らない寂寥感に包まれることがある。同時に、私に降り注ぐ温かい陽光に、あらためて母の愛を強く思い出す私でもある。

### たかが川柳されど川柳 —平成二五年下半年期—

「琅」には何篇か、わが川柳エッセイと称してその足跡を載せてきた。川柳作家を夢見つつ、とどのつまり市井の

という我が家の運命は、DNA的には純粹種故の脆弱さからの大病と障害を同朋に与えた。たまたま運良く育ちきつた自分への期待と献身は、母が亡くなるまで私に注がれた。祖父母に引き取られた姉も、一緒に育った弟も、五〇歳を相前後して病床の苦しみから解き放たれたが、残る命のろうそくを私に委ねたのだと思う。ある意味で壮絶で受けとめがたい環境のなかで私は育ったのだが、その替りというか、神の憐みなのか、母を初め、私に与えられた子どもたち、そして妻、「俺より先に逝くなよ」とつぶやいてくれる素晴らしい友人たちを与えられた。

私がLDだけでなく、すべての障害のある子どもたちのために生きていこうと決心したのは、この母、この姉弟、こうした人々との出会いがあったからであることをあらためて思い出した。

あれだけ苦労を重ねた母が、齢九〇でこの世を去った時、ある友人が、「上野のおふくろは俺たちみんなのおふくろだった」と語ってくれたことが、母の人となりを一番よく表していると思う。

本にある島田さんのことはよく覚えているが、母がわが子のためにこうした行動をとってきたことやそこで語られたエピソードなどは全く知らなかった。おそらく陰日向な

井戸端川柳評論家で終わる気配濃厚である。『作家になるうとしたのも五度六度』ではないが、素人芸とはそうしたものである。下手とは何かがやつとわかりかけてきたところであり、お恥ずかしい限りだが見直すのも修行とこの場を借りて、半年毎の拙句の虫干しをしてみたいと思う。毎月一五人の仲間と雑詠三句、題詠三句を持ち寄り、品定めをするのだが、その結果は結果として、ここでは閉山間近の鉢山、ほとんど玉なぞない玉石混交の自句のみを百字程度の短評をつけて扱うことにする。

（各人雑詠、題詠各々を一二点の持ち点を、一〜三点で評価する。五点以上が入選句となり、最多得点は金メダル。順に銀、銅メダルの荣誉に浴す。）

六月

### 古希迎え恋の修羅場で踊る夢（入選）

うっかり手傷を負えば、致命傷になりかねない歳になりました。たとえ夢であっても「恋の修羅場」をもう一度経験してみたいなどと、妄想であっても言ってみたくなる。そのこと自体が元気な証拠というわけ。

### 虫干しをしたぼうがよい君とぼく（入選）

どんな仲の良い夫婦にも長い人生には梅雨時というもの

ある。そんな時、束の間の晴れ間には二人の仲を見直すというか、そのジメジメ感を修復するチャンスとして大切にしたいほうがよいのかなと。

**死亡記事三日続けば著名人**

しばらく見ないなと思うと、同じ年頃の著名人の逝去記事に接する機会が増えてきた。著名人といえどもそうした報道はあつという間。三日ももてば超大物というわけ。きつと私たちは片隅の半行か一行。大河の一滴とはそういうものです。

**題詠「指」**

**母としたげんまん今日は息子とし(入選)**

指きりゲンマン嘘ついたら針千本飲ませ。そんな幼子時代の懐かしい思い出。時は移り、いつの間にか子育てのなかで母の姿がダブってくる。こうして親子の情愛は伝えられていくわけですね。

**サイン出す指口ほどにものを言い**

指は意外とおしゃべりなんです。ソーシャルキューという言葉もありますが、お互いのなかでの暗黙の仕草がコミュニケーションを成立させる親指も小指も人差し指も、時には中指や薬指だってそれぞれに伝える力をもちます。

**後ろ指さされる奴は大物ぞ**

で発想や表現の斬新さが必要なのでしょう。

**題詠「読む」**

**読めぬもの空気行間恋心**

読めぬものの列挙。「恋心」ははじめ「親心」だったが、言葉遊び風で、共感あまり得られない駄作。今振り返ってみると、小手先の表現に終始し、不調ありありです。どこまで続くぬかるみぞという感じ。

**添い寝して読み聞かせたは寝息だけ**

幼児を寝かしつけている母親が先に寝てしまっている姿を読みました。「軒(いびき)」ではなんだか失礼かと「寝息」にしましたが、かえって最初の句想が分かりにくくなってしまう気がします。

**趣味読書雑誌新聞漫画本**

ある面接会場で履歴書の趣味欄に読書とあるので、優しい気持ちで「どんな本が好きなの」質問すると、たった一冊だったり、題名忘れていたり、自分の専門の本だったり、軽々しく趣味が読書などと書くなど言いたくありません。全部漢字も遊び。

八月

**モバイルと距離をおくのは老いの知恵(入選)**

「奴ほど」という意味ですが中人になるので「奴は」にしました。大物になるうなどと野心を抱かず、地道に後ろ指など差されぬように生きてきましたが、光強ければ影もまた濃しというわけ。世のなかとはそういうもの。

七月

**選べども選べども暮らし変わらず**

これも選挙中の時事句。啄木も選挙に行ったのかな、なんて思いながらの本歌取り。選んでも、選んでも、わが暮らし楽にならざり……。繰り返す選挙も単なるお祭り。だからまつりごとなのか。私たち庶民はじつと何を見ればいいのか。

**候補者よそんなにやる気見せるなよ**

選挙が近づくと、街頭でもTVでも、候補者が世の中を自分一人ですべて変えてみせるかのごときやる気をみせる。しかし、一旦当選してしまえば、あの時の約束はどこへやら。選挙前のかれの公約は空々しく、そして騒々しい。

**梅雨明けてプール飛び込むときの声**

芭蕉風に 合戦の鬨の聲に模してみました。この時期、こうした本歌取りにやや惹かれましたが、川柳としてはあまり上等ではないようです。もつと句想を明確に、その上

身の回りはPC、モバイル、タブレット、スマホ……。であふれかえっている。おまけにOSもどんどんバージョンアップしていく。進化よ止まれ、と叫びたくなる心境を読んだのですが、必至についていくだけでも生きるエネルギーなのですが。

**孫来襲体力気力総出陣(入選)**

孫を読んだシルバー川柳は多い。「来る日待つ帰ったあととはホツとする」風の気持ちはよくわかる。かわいいです。とてもとても。でもぐったりします。蒙古来襲ではないが、迎え撃つ老夫婦の気持ちをすべて漢字で読みました。遊び過ぎかな。

**夏草の下に横たう写真帳**

東北地方を何度か訪れたが、震災の爪痕は予想以上に深く厳しい。夏草で覆われてしまっている、その下からアルバムなどが出てきて、さらに悲しみを誘う。強者どもが夢の跡的な、そして夏なので天の川も思い出しつつの一句。

**題詠「靴」**

**踏まれても踏まれてもただ耐える僕**

考えてみれば靴って大変ですね。毎日毎日踏まれ続けて、やがて擦り減りくたびれてお払い箱。そう考えるとなんだ

か人生そのものみたいな気がして。靴って人生の象徴なんですね。

**素肌にYシャツ素足に靴ですか**

伊達こいて下着をつけずにYシャツを羽織る若者がいる。湿度の高い日本では汗でべったり。靴下をつけずに靴を履くのがかっこいいと思ってる俳優もいる。水虫かいお前は。キザな勘違い男どもを批判的に読みました。

**踏みつけにしたのはあなたなんですよ**

靴に投影したさまざまな男女の想い。お互いに相手を傷つけてしまったことをわかっていないんです。そんな気持ち、一七文字の破調句で一句詠んでみたのですが、伝わりにくいですかね。

九月

**お散歩もエクササイズと名を変えて**

健康維持に必死の高齢者。長嶋はリハビリといわずにトレーニングと言い換えて頑張ったそうですが。老人も日課の「お散歩」では悠長すぎるので、エクササイズとカッコよく。でもやってる中味は一緒なんです。

**我にあり朝八分の隠れ里**

たった一人の沈黙の空間、それがおトイレ。美術書や短

編など置いてゆつくり過ごす我が家に確保された個室こそシャングリラ。でも家族が多い人はそうも言っていられないでしょうね。何分とするのが妥当か迷いました。

**ともかくもがんばってみますあと七年**

東京五輪決定。余命を考えることが多くなっている昨今、とりあえず七年後の開催は一つの目標。招致の良し悪しは別にして、なにがしかの目標を与えたことは確かな五輪効果ではあります。

**題詠「自由」**

**縛らぬと口で言いつつ縛る君**

よくある句想かもしれませんが、男女どちらにもありそうですね。なかにはその束縛が重くて離婚に発展したり、逆にその束縛を愛だと勘違いしたり。得てして男は「自由にしていいよ」なんて口では言いながら、束縛したがるもの。

**独り身の自由気ままな不自由さ(入選)**

連れ合いに先立たれた友、自由になったと強がりはいつても傍から見れば何かと不自由さを託しよう。そんな友を見て、うらやましさをよりも同情して読んだのですが。単身赴任のサラリーマンにも当てはまりそうですね。

**奔放の一手手前でやめる癖(入選)**

**題詠「めがね」**

**偏見はよせといいつつ色眼鏡**

偏見はよくないと口では言いつつも、気がつけば、つい人を色眼鏡で見えてしまいがちな自分。そんな狭い料簡の自分を自戒する意味で作りました。そのまんまといわれればそのまんまの凡庸な句ではありますが。

**老眼鏡今や読書の無二の友**

歳とともに衰えるものは眼。近視でも老眼になるが、細かい字などはメガネをはずせばよく見える。若い時分、目のよかった家内などは、最近、針仕事をすればすぐ、「針を通して」と私に頼む始末。いつの間にか老眼鏡が離せないくなる。

**かくれんぼ逃げる相手は鍵メガネ**

毎日探し物をしている。それをかくれんぼとしゃれてみたのだが評価は低かった。メガネ鍵でも今一。財布・携帯・時計・キー(鍵)・スイカの頭文字をとって「酒とキス」なんていう呪文を作ったが、それを言うのを忘れる始末。

一二月

**ハロウインを食べてみたいと老母いう(入選)**

よくあるパターン。「フェラガモ」や「デジカメ」のエ

これは自分では好きな句です。男たるもの一度の人生、何か突き抜けるように生きたいと思いつつも「成功の一手手前でやめる癖」みたいなひ弱さがあったこと反省しきりです。自由奔放、相当わがままに生きてきたつもりですが。

一〇月

**見送りの友いるうちに発つが花 (入選)銀メダル**

これも実感。早すぎても遅すぎても。知人の葬式に出席するたびにとらわれるのはこの思い。弔辞を読む羽目になり、こいつに読んでもらうつもりだったのにと思えば余計その思いは強くなります。

**とうとうあなたも三本足ですか**

先日足を痛め医者に行くと、「付き合っていくよりしよるがないですね」と冷たい宣告。ストックを杖がわりに外出すると、同じ格好の人がやたら目につく。スフィックスの謎かけに因んで一句読みました。

**世の流れ橋の根元を洗い出す**

大阪の橋元市長、最近は大失言続き。とうとう馬脚がみえた感じで、かつての勢いはない。そんな風体を、時事句として読んだのですが、何を言っているのかわからないと切って捨てられました。

サはどこかと・・・ですが。ここ数年、やたらハロウインの習慣が、商魂に乗ってわが国にも押し寄せてきています。そんな風潮を揶揄しての一句です。

**台風がそれて気抜きの不謹慎(入選)**

子どものころから台風の接近は軽い緊張とわくわく感があつた。それでも進路がそれたりすれば、「なんだはずれたのか」などと多少がっかりする。被害を受けられた方々を考えればはなはだ不謹慎、まことに申し訳ない。

**偽装ばれ次は誤用に偽装する(入選)**

偽装と誤表示は違ふと記者会見で言い張り職を辞したホテルマンがいた。最初からだますつもりと単なるミスとの違いはちがうといい抜けたかつたらしいが。誤表示では字余りになるので誤用としたが、どうも川柳としての出来は・・・。

**題詠「壁」**

**家庭内見えない壁が厚さ増す**

いろいろな壁がある。見えない心理的な壁を読んでみたかつたのだが。ひきこもりの子を抱えた家族の苦しみなどを思つて作つたが、あまり共感性は得られなかつた。課題がシビア過ぎるのかもしれない。

**部屋こもる息子ばかりか夫まで**

思いがけない経験に、「日本って、こんな美風が残っているんだ。まんざら悪くはないな」と一日幸せな気分になりました。

**ストックを杖とは云わぬ山ガール**

今流行の山ガール。山の専門ショップにいくと澁刺とした高齢ご婦人たちに圧倒されます。彼女たちは決して年寄りじみたことはいりません。そうした情景を読み温めておいた句なのですが、いつの間にか陳腐になつてしまいました。

**題詠「車」**

**あの出逢い自動ブレーキあつたなら(入選)：銀**

追突したこともされたこともあつた。最近流行になりつつある追突防止の自動車技術。男女の出会いにも自動ブレーキが利いたらどうなるのだろうか。結婚を後悔しているのですかなんて言う評は余計なお世話。

**乳母車運転手付き自家用車**

運転手付きの自家用車に乗ることはなかつたなあと思いつつ、孫を乳母車に載せて散歩させているママさんたちの姿を見て、赤ちゃん時代は、みんな運転手付きの自家用車なのだと思つて、一句作りました。

**その日まで離したくない免許証(入選)**

これも前句同様の句想。ひきこもりの息子だけでなく頼りの夫まで部屋にこもり気味になつてしまつたら、奥さんはさぞやつらいだろうかと、成りすまし気味に作りましたが、失敗作の見本です。

**汚染水防ぐ壁ありやノーベル賞**

汚染水問題は深刻です。ただ貯蔵するだけの対策。それがまた漏れたりして。日本の先端技術によつて何とかできないものでしょうか。最近ではニュースにもなりません。なにも事態は変わっていないのに。ノーベル賞は字余りですが、他になくて。

一二月

**子が育ち二人ぼっちのクリスマス**

エンブティネスト(空巢)とはよくいったもの。「いつの間」ではわかりにくいかと「子が育ち」としましたが、説明的との批評。夫婦水入らずとはいえ二人ボツチなんです。この表現、ドラマのタイトルにあつたようで、苦心の作もドボン。

**ピアスした兄ちゃん席をありがとう(入選)：銅**

席を譲られてもあまり怒らなくなりました。実際に有つたことですが、今風の若者から譲られたことがありました。

六五歳を過ぎると運転免許の更新はだんだん厳しくなる。確かに事故率も上がるようだが、やたら返却しろと警察は言う。しかし、これが元気で生きている証だと思ふ老人もたくさんいるのではと、そんな境地から。

川柳の極意のひとつは「うがち」といわれる。漢字の「穿つ」で、本来は『穴』を開けること。表面的に見えにくいものや、人が見落としているような事柄に目を向けて、それを明るみに引きずりだし、その正体を暴きだすことである。自分自身の本心や本音でさえある。

多少、皮肉っぽいものの方にもなるが、この表現が「笑い」を誘うのは、それが風刺や批評につながるからである。短いフレーズで急所をはずさないのが、川柳のコツであるが、さほど容易ではないところに、永遠のテーマがある。短評もまた然り。

(了)